

特 集

在宅看護学実習における
Web 会議システムを活用したカンファレンス

深谷 由美 松田 優子 百瀬由美子

特 集

在宅看護学実習における Web 会議システムを活用したカンファレンス

深谷 由美¹ 松田 優子² 百瀬由美子¹

I. 緒言

看護学基礎教育における臨地実習の目的は、学生が知識・技術・態度の統合を図ると共に、対象者との関係形成やチーム医療において必要な対人関係形成能力を養い、看護専門職としての批判的・創造的思考力と問題解決能力の醸成、高い倫理観と自己の在り方を省察する能力を身に付けることを目指す（文部科学省, 2020）とされている。そして、「在宅看護論」は、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の第5次改正により、「地域・在宅看護論」と名称が変更となり、療養を含めた地域で暮らす人々を対象ととらえるという趣旨が追加された。

在宅看護学実習において実習施設の多くは訪問看護ステーションであるが、1施設に従事する看護師の全国平均は約7.2人である（厚生労働省, 2021）。そのため、訪問看護ステーションの指導者は、療養者からの緊急な訪問依頼やスタッフの休みがあると急遽訪問の予定を変更し、療養者宅に訪問するため、カンファレンスに毎日参加することは困難である。また、1施設の学生の受け入れ人数は2～4人と少なく、学生は複数の施設に分散して実習することから、教員は、2施設～3施設を担当する。教員は予め学生が訪問看護師に同行訪問する予定を把握し、学生が訪問看護ステーションに滞在している時間に合わせて実習指導に訪れるが、全ての学生に対面で指導できない。また、カンファレンスにおいても、時間が重なることや実習施設間に距離があることから全てのカンファレンスに参加することは困難であり、学生のみでカンファレンスを行うことがある。教員の役割は、複雑で多様な臨

地の場面において、学生がその現象を理解し、必要とされる看護ケアを判断し、実施するプロセスを導くことや学生が看護の理解を深めることができるように学生自身の体験を教材となるように創意工夫することとされている（文部科学省, 2020）。また、カンファレンスにおいて、「看護現象からの原理原則の発見」、「理論理解の定着化」、「看護現象への理論適用」を目指した教育活動を展開しており（安齋, 船島, 杉森, 1993）、学生が観察・体験した看護の現象を看護学の本質や法則に照らし合わせて解説・統合することや実習目標の達成度を把握し、指導方法を検討しており（杉森, 船島, 2012）、教員・実習指導者ともにカンファレンスを有効な指導方法と考えている（吉川, 蔵屋敷, 藤田, 2015）。

これらのことから、在宅看護学実習において教員がカンファレンスに参加する参加率を向上するためにWeb会議システムを活用することを考えた。先行研究においては、新型コロナウイルス感染症によるオンラインシステムによる実習についての研究はあるが（堀, 2022；小野若, 竹森, 西村他, 2022）、カンファレンスにWeb会議システムを活用した研究は散見しない。そのため、本研究では、在宅看護学実習においてカンファレンスを対面で行うことを推奨したうえで、Web会議システムを活用したカンファレンスを導入し、カンファレンスへの教員の参加率の増加とその課題を明らかにすることを目的とした。Web会議システムを活用してカンファレンスを実施することで、学生との関る時間が増加することや教員が無理な移動を避けることで教員の心身の安全を確保することができ、在宅看護学実習を遂行する上での一助になると考える。

¹ 日本赤十字豊田看護大学 在宅看護学領域

² 名古屋女子大学 健康科学部看護学科

II. 研究方法

1. 実習の概要

1) 実習目的

在宅療養者と療養生活を支える家族の生活状況を理解するとともに、各施設の概要と在宅ケアの実際を通して、必要な在宅看護を実践するための基礎的能力を養う。また、地域における看護実践に必要な保健医療福祉制度の活用と連携のあり方について学ぶ。

2) 実習目標

- (1) 受け持ち療養者と家族が地域で療養生活を継続するために必要な看護を理解する。
- (2) 在宅看護の特性と地域における看護実践に必要な制度を理解する。
- (3) 地域における保健医療福祉サービスの連携や協働と看護の役割について理解する。
- (4) 看護倫理をふまえ、学習者として積極的な態度で実習に臨み、責任ある行動をとることができる。

3) 実習方法

実習は、90 時間 2 単位の实習である。2 週間 10 日間のうち、8 日間を訪問看護ステーションにより実習を行い、日々カンファレンスを実施した。受け持ち療養者 1 名を担当し、看護過程の展開、立案した看護計画の一部を実施するとともに受け持ち療養者以外の訪問や担当者会議等に参加する（表 1）。

4) 教員の指導体制

在宅看護学実習は、教員 3 名と実習補助教員 1 ～ 2 名で担当している。18 か所の実習施設は、近隣市町村を含め、片道 45km という広範囲に点在している。

しかし、1 施設の学生受け入れ人数は、2 ～ 4 人と少ないことから、教員 1 名が 2 ～ 3 施設を担当する。

5) Web 会議システムを用いたカンファレンス

学生は実習施設毎にタブレットとポケット Wi-Fi を携帯した。事前に、使用方法、使用可能な場所、充電方法、保管方法等を実習施設と打合せ、すべての施設より使用の許可が得られた。学生は、指導者、教員と時間調整して学生主体でカンファレンスを開催した。教員は、カンファレンスに対面で参加することを推奨し、参加できない場合は、Web 会議システムを使用して参加した。

2. 対象

1) 教員のカンファレンスへの参加率

Web 会議システムを未使用でのカンファレンスは、延べ 34 事業所に実習に行った 89 人が実施したカンファレンスを対象とし、Web 会議システムを使用して実施したカンファレンスは、延べ 40 事業所 115 人が実施したカンファレンスを対象とした。

2) Web 会議システムを使用しているカンファレンスについての学生の使用感

Web 会議システムを使用したカンファレンスについて学生の使用感は、2022 年の 8 クール、115 人を対象とした。

3. データ収集

1) データ収集期間

2021 年 10 月から 2022 年 12 月

表 1. 実習方法

曜日	内容
月	【学内】オリエンテーション
火	ステーション実習 カンファレンス
1週目	水 ・実習施設によるオリエンテーション カンファレンス
木	・受け持ち療養者の訪問 カンファレンス
金	看護過程の展開と一部実施 中間カンファレンス
月	・受け持ち以外の療養者宅に訪問 カンファレンス
火	・担当者会議や退院時カンファレンス等に参加 カンファレンス
2週目	水 カンファレンス
木	最終カンファレンス
金	【学内】実習全体のまとめ

2) 教員のカンファレンスへの参加率

Web 会議システム未使用時のカンファレンスの状況を 2021 年 10 月から 12 月の 5 クールとの実習記録より抽出し、Web 会議を用いたカンファレンスを 2022 年の前期・後期 8 クール実習記録より、教員のカンファレンスへの参加の有無を抽出した。

3) Web 会議システムを使用したカンファレンスについて学生の使用感

2022 年の在宅看護学実習終了後、「研究参加のお願い」を配布し、研究の目的、方法、個人情報の保護、結果の公表など説明し、Web 会議システムを使用し、カンファレンスについて学生よりマイクロソフトの Forms によりアンケートを収集した。

4. 調査項目

1) カンファレンスへの教員の参加

施設数、開催されたカンファレンス、教員のカンファレンスの参加

2) Web 会議システムを使用したカンファレンスについて

タブレットを使用しての Web 会議システムの容易さを「対面と変わらずできた」、「対面の方がよかった」、「Web 会議を使用した方がよかった」、「Web 会議を使用したカンファレンスはしなかった」の 4 項目、カンファレンスの時間調整の容易さを「容易であった」、「困難であった」、「時間調整する機会はなかった」の 3 項目とタブレットによるカンファレンスに関する自由記述で調査した。

5. 分析方法

単純集計をおこなった。

6. 倫理的配慮

研究の目的、方法、個人情報の保護、心身への負担

の配慮、結果の公表、研究協力と撤回の自由、研究参加により期待される利益と不利益、個人情報の取り扱い、について文書で説明し、返信をもって同意を得たこととした。また、Forms での回答は、メールアドレスを含め個人が特定できないようにして実施した。本研究は、研究者が所属する倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号 2203）。

Ⅲ. 結果

1. カンファレンスへの教員の参加

Web 会議システムを未使用時のカンファレンスは、241 回開催され、教員が参加できたカンファレンスは 103 回と 42.7%であった。Web 会議システム使用時のカンファレンスは、288 回 83.3%であった（表 2）。

2. Web 会議システムを使用したカンファレンス

1) タブレットを使用したカンファレンス

タブレットを使用したカンファレンスは、14 人（51.9%）が、対面と変わらず討議することができたと回答しているが、対面の方が討議しやすかったが 4 人（14.8%）であった（表 3）。

2) カンファレンスの時間調整

カンファレンスの時間調整は、21 人（77.8%）が、「容易であった」と回答しており、2 人（7.4%）は「困難であった」という回答であった（表 4）。

3) Web 会議を使用したカンファレンスに関する学生の自由記述

学生は、Web 会議システムに関して『対面と同等のカンファレンス』が可能であり、『カンファレンス時間の調整の安易』であった。しかし、「画面越しだと反応が分かりにくい時があった」という『Web 会議システムによる困難』や「音量調整が大変だった」や「聞き取りにくいことがあった」という『危機の不

表 2. Web 会議システム未使用と使用のカンファレンスの状況

項目	未使用	使用
実習施設数（延べ数）	34（事業所）	40（事業所）
学生数	89（人）	115（人）
開催されたカンファレンス	241（回）	288（回）
教員が参加できたカンファレンス	103（回）	240（回）
教員のカンファレンス参加率	42.7（%）	83.3（%）

表3. Web 会議システムを使用したカンファレンス

項目	n=27	
	(人)	(%)
対面と変わらず討議することができた	14	51.9
対面の方が討議しやすかった	4	14.8
Web会議を使用した方が討議しやすかった	2	7.4
Web会議を使用したカンファレンスはなかった	7	25.9

表4. カンファレンスの時間調整

項目	n=27	
	(人)	(%)
カンファレンスの時間調整は容易にできた	21	77.8
カンファレンスの時間調整は困難であった	2	7.4
時間調整する機会はなかった	4	14.8

都合による困難』があった。「時間を指定しても実習の状況や教員の予定により時間調整に戸惑った」という『予定変更による時間調整の困難』があった(表5)。

IV. 考察

本研究により Web 会議システムによるカンファレンスは、カンファレンスへの教員の参加率を高くすることが可能であり、学生は Web 会議システムによる負担は少ないことが明らかになった。しかし、環境によりカンファレンスの音声聞き取りにくいことや、

訪問時間の変更、指導者の都合によるカンファレンスの急な時間変更により教員と時間調整をすることが困難であるということが課題であった。

Web 会議システムを利用したカンファレンスは、教員の参加率が増加し、カンファレンスにおいて学生が体験してきたことを解説・統合したり、実習目標の到達度を把握しながら教員が指導方法を検討する機会になると考える。教員は学生が訪問先で体験したことから、多様な視点が持てるように助言するためにカンファレンスなどで指導機会を増加させる必要があり(深谷, 2014)、Web 会議システムを使用して教員が

表5. Web 会議システムに関する学生の自由記述

対面と同等の カンファレンス	時間差もなく、Web会議でのカンファレンスでもよい 学生だけでカンファレンスするよりよい 全然大丈夫であった 効率よくよかった
カンファレンス時間の 調整の安易	担当教員が参加できる候補の時間が豊富になり時間調節が楽だった 訪問の時間にズレが生じた際に連絡と同時に時間調整でき、討議したいことをその日中に解決できるのは良かった
Web会議システムによる 困難	画面越しだと反応が分かりにくい時があった カンファレンス中にタブレットをききながら話し合うという苦労があった
機器の不都合による 困難	音量調整が大変だった 聞き取りにくいことがあった 指定された時間になっても繋がらなかった
予定変更による時間調 整の困難	時間を指定しても実習の状況や教員の予定により時間調整に戸惑った

学生と関わる機会が増加することは学生の学びの深化に繋がると考える。

しかし、学生は「画面越しだと反応が分かりにくい時があった」という回答もあり、教員の表情や動作などの反応が学生に伝わりにくいという現状から、学生に通じるように、動作を大きくしたり、教員の考えていることを言葉で伝えたりする必要があると考える。そして、カンファレンスが時間変更になった場合、時間調整はメールで行っていたが、常に学生がメールを使用できる環境ではないため学生に困難さがあった。訪問看護ステーションに、教員との連絡に関する携帯電話の使用とタブレット等での時間調整することの理解を求める必要があり、今後の課題である。また、「音量調整が大変だった」や「聞き取りにくいことがあった」という機器的な課題もあり、集音器などを使用するなど環境を整える必要がある。

教員からは、訪問看護ステーションへ指導に行った際に会えなかった学生とも Web 会議システムを通じて質問に答えることができたり、講義等により学生の予定に合わせて訪問看護ステーションに訪問できない時もカンファレンスに参加することができることから、「時間が迫る中、車で無理な移動が減った」という声もあった。しかし、教員が Web 会議システムを活用してカンファレンスをする場所に課題があった。カンファレンスは個人情報扱うため、場所が限定される。時間的に大学に戻ることができない場合、他者に聞かれない場所の確保が必要である。教員が Web 会議システムでカンファレンスを実施する場所については今後の課題である。

本研究は、カンファレンスへの教員の参加率と学生の使用感について調査したもので、カンファレンスの内容について調査していない。これらのことはこの研究の限界であり、今後の課題である。

V. 結論

Web 会議システムによるカンファレンスは、教員の参加率を高くすることが可能であり、学生は Web 会議システムによる負担は少ない。しかし、Web 会議システムに関する機器的な課題、急な時間変更時の時間調整、教員が実施する場所について課題があることが明らかとなった。

文献

- 安齋由貴子, 舟島なをみ, 杉森みど里 (1993). 看護学実習のカンファレンスにおける教授活動の質的分析. 日本看護科学会雑誌, 13 (3), 224-225.
- 深谷由美 (2014). 訪問看護ステーション医における臨地指導者からの指導内容—指導内容の分析と同行訪問回数からの検討—. 愛知きわみ看護短期大学紀要, 10, 87-92.
- 堀智子 (2022). 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 影響下での在宅看護学実習の実践報告. 藍野大学紀要, 34, 25-35.
- 厚生労働省 (2021). 令和 3 年介護サービス施設・事業所調査の概況. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service21/index.html>. (2023 年 12 月 20 日閲覧)
- 文部科学省 (2020). 看護学実習ガイドライン. https://www.mext.go.jp/content/20200114-mxt_igaku-00126_1.pdf. (2023 年 12 月 20 日閲覧)
- 小野若菜子, 竹森志穂, 西村恵理奈他 (2022). 新型コロナウイルス感染症の影響によるオンラインでの在宅看護実習における教育活動報告. 聖路加国際大学紀要, 8, 18-23.
- 杉森みど里, 船島なをみ (2012). 看護教育学. 医学書院, 東京.
- 吉川峰子, 蔵屋敷美紀, 藤田三恵 (2015). 実習領域の違いによる実習指導と特徴と今後の課題. 第 45 回日本看護学会論文集; 看護教育, 45, 170-173.